

銭函村～朝里郡大字銭函村～小樽市銭函町

①

明治30年（1897年）、北海道区制、1級町村制及び2級町村制が公布され自治制度

は一大進歩を来たし、明治32年（1899年）、札幌、函館、小樽に区制が施行され、15町

村に、1級町村制が施行された、これが本道における自治制施行の始まりである。

明治35年（1902年）、町村の財政力及び発達の程度により、2級町村制が施行され、こ

れに伴い、朝里、熊碓、張碓、銭函の各村は合併して朝里村となる。

明治39年（1906年）、銭函村の工業地の基礎となる「新宮商行」が、韓国仁川府八坂

神社下灘埋立地に設立する。明治40年（1907年）、小樽区色内町に出張所を開設し、

大正8年（1919年）、本社を韓国より小樽区稲穂町に新築移転する、昭和10年（1935年）、

広い土地があり駅のそばということで、銭函に合板工場を建てる、現在までも銭函の人達の

就業先となっている。

明治40年（1907年）、銭函浜中に浅羽 靖（あさば しづか）氏が「製塩所」を設立す

る。府県、本道を除く専売法施行外の樺太及び海外へ輸出することを条件に許可された。

（日露戦争の不足分軍事費を確保するため）。明治41年（1908年）には年産1,400石余

(140トン余)を生産した、同年中の北海道全産額に当たっていた。大正元年(1912年)

まで操業していたが不振のため廃止となるが、銭函の人の就業に貢献した。

大正2年(1913年)、北海道で初めてスキー競技会(ニキロレース)を、北海道大学

スキー部主催で「第1回スキー大会」が銭函で開催された、通称「熊坂山」現銭函中学校の

裏山一帯から銭函駅を含む地域で競技が行われた。この地域は、札幌スキー倶楽部や陸

軍兵隊のスキー訓練につかっていた。駅があり、商店もあり、山、川、林、丘があり、さらに

海のそばと、風景も最高でスキーの訓練には恵まれた場所であった。

～銭函村～朝里郡大字銭函村～小樽市銭函町～

②

大正3年（1914年）、銭函商工会（現商交会）が創立する、第1次世界大戦（ヨーロッパ

を主戦場として主要国25ヶ国が参戦して行われた戦争）で、日本の商品輸出が急増した

ため、商業、工業生産が増大して経済が発展する。

大正10年（1921年）、銭函海水浴場で「第1回北海道水泳講習会」を開催する、

日本水泳界の権威 内田 正棟（うちだ まさよし）氏による、北大予科水泳部後援の水

泳講習会を銭函海水浴場 林家前を借り受け実施する、銭函村有志が協賛会を設けて

講習会を成功させ主催者、参加者から深く感謝される。

この講習会での協賛が、銭函海水浴場の運営、整備等の基礎となり、これまでの海水

浴場運営よりも組織だった方向に変わり、よりお客様として迎える海水浴場としての体制

を序々に整えていく。

昭和3年（1928年）、銭函大浜に小樽ゴルフ倶楽部が創立する、発起人佐藤 棟造

（さとう とうぞう）氏（三菱鉱業 小樽支店長）ほか9名の発起人は小樽市長をはじめ政財

界人が占め、ゴルフコースも造られる。 コースは牧場と隣接した非常に簡素なものであつ

たが、小樽から列車で通い小樽の政財界の社交場として活用していた。

（ゴルフ倶楽部は日本で8番目に古い倶楽部であり、コースは現在、日本屈指の高度の

技術と戦略を要求されるコースとなっている。）

銭函は、海水浴場とゴルフ場によって人の鉄道利用が活発になって経済効果も上が

ってゆくようになる。

～銭函村～朝里郡大字銭函村～小樽市銭函町～

③

昭和6年（1931年）、銭函駅舎が鉄道利用者増加のため建替えられ現駅舎となる。

開拓使時代に戻ったような様式の駅舎を、銭函の人達は非常に大切にしている。

昭和6年（1931年）、北海道庁は、道路改良の必要性を認め、小樽・札幌間の国道の

大規模改良工事に着手した、費用は、失業救済費、産業振興費、農漁村振興費をもって

工事を始め、昭和9年（1934年）1月完成する。同年、鉄道省の省営バスが札幌・小樽

間に運行された、このバスは北海道での第1号である、鉄道と共に利用が増える。

昭和10年（1935年）12月、銭函に広い土地が確保できた新宮商行は、合板工場を

完成させ、翌年、全国で初めて道産材を原料とした合板を輸出、ヨーロッパ市場を開拓し

た、（全国の輸出合板の3割、北海道輸出合板の9割を生産する）。新宮商行の工場には

銭函駅経由で木材が道内より運ばれ貨物列車が頻繁に往来するようになった。

昭和15年（1940年）、朝里郡を小樽市と合併し、銭函村は銭函町と改称し、小樽市

銭函町になる。

昭和16年（1941年）12月、日本がアメリカに対して戦線布告し、戦争がだんだん身

近になっていって、昭和18年（1943年）、新宮商行銭函工場は、海軍の監理工場「愛国

第70工場」として、海軍特殊上陸用舟艇の合板を生産し、全国の造船所へ供給した、会

社、従業員一体となって、国のために貢献した。

昭和20年（1945年）、工場がアメリカ軍の空爆を受けて主要設備を破壊され、修復後

火災にあたり、非常に困難な時代を経て、昭和23年（1948年）、工場を復興し同時に

輸出も再開し、現在に至っている、銭函の人の就業先にもなっていて町に貢献している。